

特集 「古典学の再構築」公募研究の概要

A01「原典」	10
A02「本文批評と解釈」	13
A03「情報処理」	18
A04「古典の世界像」	19
B01「伝承と受容(世界)」	25
B02「伝承と受容(日本)」	30
B03「近代社会と古典」	33

平成11年度より発足した44件の公募研究の概要を以下に掲載する。各研究は、7種の研究項目ごとにまとめられ、研究項目内では、研究が主として関る地域により、日本に近接するものから、日本 中国 チベット インド イスラム イスラエル 西洋の順に並べられている。

なお、計画研究の概要は、本誌第2号(平成11年2月)に掲載した。これにより、特定領域研究「古典学の再構築」のすべての研究の概要を紹介したことになる。

A01「原典」

A01 西洋近代哲学と中国古典

研究代表者 堀池 信夫
筑波大学哲学・思想学系 教授

研究目的

①中国古典はいうまでもなく中国・日本・韓国(そしてベトナム)を通じて東アジア共通の古典であったといえる。近代になると、それらの古典は西欧に対して紹介されることになり、そのことによって西欧に相当の知的衝撃をもたらすことになる。その結果、中国古典は東洋の古典というのみならず、世界の古典という性格をもつことになるが、本研究はそうした視点から中国の古典を見直すことを目的とする。そこで、平成11年度より13年度の間、西洋近代の哲学者たちが中国の古典をどのように受けとめ、また影響を受けたのかという問題について、18世紀から19世紀までについて通史的(通時的)に明らかにする。多くの西洋近代の哲学者たちが東洋の哲学に興味を抱いていたことは、断片的・個別的には従来指摘されてきたことではあったが、それを歴史的に見通して展望を得るという作業は未だなされていないことである。本研究はその点を衝くものである。②従来、西欧

の中の東洋哲学の影響という問題に関しては、17世紀～18世紀のイエズス会の入華を中心にするものがほとんどであり、①で指摘したような18世紀以降、西洋の近代哲学を中の東洋という問題をめぐり、たとえば中国古典の翻訳紹介の事情などを含めて、これを通史(通時)的にまとめたものは未だない。そしてこうした問題を明らかにすることによって、西洋の東洋を見る眼の本質が奈辺にあるのか、そうした問題が具体的に浮かび上がることが期待できる。

③たとえば、カントと東洋、ハイデッガーと東洋などというテーマで、かつて国際会議などが開催されたことがあり、そうした折には研究報告論文集などが刊行されてきた。しかしそれらに収録された報告論文等は大概の場合、個別で細かなテーマを扱うものにとどまっている。本研究はより広い視野のもとに通時的に展望しようとするものであり、現在のところ同様の方向性をもって行われた研究はほとんどないといってよい。

研究計画・方法

①西洋近代哲学における中国情報のソースとなった『レトル・エディフィアン』『メモワール・ド・シノワ』を中心に関連部分の資料整理と分析、執筆の効率を上げるためにできるだけ処理速度の早いコンピューターを導入し、研究成果の迅速な発表を可能にする。

②18世紀以降の西欧語に翻訳された中国古典について調

査を行うが、その処理においてもコンピューターの活用は不可欠である。

③近代哲学者の文献中から中国古典に関連する分野を探索し、その分析のもとに資料をデータ化し、執筆に進む。

A01 チベット蔵外文献学説綱要書の視座より見たインド古典諸論書の思想の文学的研究

研究代表者職 森山 清徹
佛教大学文学部 教授

研究目的

本研究は最後期のチベット蔵外文献学説綱要書の批判的校訂本の翻訳を作成しつつ、そこに典拠として引用、解説されるインド古典諸論書の思想内容を吟味、分析し、チベット仏教思想史の形成過程に於いてインド古典諸論書が反映されている足跡を実証することを目的とする。多くの学説綱要書のうち、ジャンヤンシェ - パの大学説綱要書 (Grub mtha'chen mo) とチャンキャ二世ロルペ - ドルジェによるチャンキャ学説綱要書を取り上げる。その理由は、それらが最も発展した形態を示し、またチベット人がインド思想をどのように消化し独自の思想をどのように形成したかを最も詳細に見ることができるからである。国内外のそれらの研究にあっては、批判的校訂本が整備されておらず、また内容の分析に於いても、インド諸文献への跡付けと背景となる思想の理解が著しく不十分である。このような状況下において、森山は、ここ二十年来インド中観派諸論書及びチベット学説綱要書の読解と分析を継続して進めてきた。それ故、網羅的に理解し得る準備は整っている。

研究計画・方法

中観学派章の批判的校訂本と翻訳

チベット蔵外文献学説綱要書の中観学派章の批判的校訂本と翻訳を遂行する。

ジャンヤンシェ - パの大学説綱要書 (Grub mtha'chen mo) の諸版並びにチャンキャ二世ロルペ - ドルジェのチャンキャ学説綱要書 (lCang skya grub mtha') の諸版の校合により 批判的校訂本と翻訳を遂行する。その計画遂行のために、最新のコンピュ - タと周辺機器の購入を必要とし、またチベット蔵外文献及びチベット大蔵経、インド、中国で出版されたチベット学術図書、関係する研究書 (洋書、和書) の購入を必要とする。

A01 スコイエン・コレクションのアフガニスタン出土仏教写本研究

研究代表者 松田 和信
佛教大学付置研究所 助教授

研究目的

今から数年前、アフガニスタン・パーミヤン渓谷北部の洞窟の中で、アフガン難民によって大量の仏教写本が発見され、それらはヨーロッパのマーケットを経由して、ノルウェーの写本蒐集家マーティン・スコイエン氏に引き取られた。これらは、カローシュティー文字、クシャーナ文字、北東型グプタ文字、北西型グプタ文字、ギルギット・パーミヤン第1型文字、同第2型文字 (我が国で言う悉曇文字に同じ) といった、1世紀から8世紀にかけてのインド文字で書写された貝葉 (ターラ椰子の葉)、樺皮 (白樺の樹皮)、皮革写本で、その中には現在判明しているだけでも、カローシュティー文字『大般涅槃経』 (2世紀)、クシャーナ文字『八千頌般若経 (小品般若)』 (2世紀後半)、グプタ文字『勝鬘経』『阿闍世王経』 (4世紀) などの、驚くべき内容と年代の仏教文献が含まれている。これらの写本類はその重要性からして一刻も早く研究・出版され、学界の共有財産となることが望まれるが、本研究の代表者 (松田) は、ヨーロッパの研究者と共に、コレクションのオーナーであるスコイエン氏と交渉を重ねた結果、氏より研究・出版の依頼を受けた。本研究の目的は、これらの写本類を書体別、内容別に分類し、それらを解読して未同定写本を同定し、最終的には、出版のための準備を行うことである。コレクションのオーナーであるスコイエン氏よりコレクションの閲覧・複写と研究を許可されているのは、日本人研究者としては研究代表者ただ一人であり、将来これらが公開されたなら、インド仏教研究のみならず、インド文字研究あるいはインド古典研究に多大な貢献をなすことを信じる。

研究計画・方法

スコイエン・コレクションに含まれる写本類は小さな破片も数えて、全体で約1万点以上にのぼるが、写真撮影がスコイエン氏によって行われ、現在それらが順次に研究代表者の手元に届きつつある (現在その大半が既着)。従って、研究対象となる写本資料の入手についての問題は認められないので、本年度はこれらの写真を用いて断簡類を書体、内容別に分類して同定作業を行い、それと平行してできる限りそのローマナイズを順次コンピュータに入力したい。また写真の判読不明箇所を確認するため、本年秋にヨーロッパの研究者と共に現地共同調査を行う予定である。

A01 近世ペルシア語によるイスラーム世界史記述の展開に関する古典文献学的研究

研究代表者 井谷 鋼造
追手門学院大学文学部 教授

研究目的

本研究の研究代表者は平成5～7年度(総合研究A「ペルシア語古写本史料精査によるモンゴル帝国の諸王家に関する総合的研究」)や平成8,9年度(国際学術研究「ウズベク諸ハーン国に関する古文書の歴史学的研究」)科学研究費補助金の研究分担者となっており前者では、研究成果を発表し、後者では資料調査と学術交流をおこなってきた。これらの成果や経験をもとに上記の題目で公募研究をおこなう。その第一の研究目的は、西暦13世紀に近世ペルシア語で書かれた、古典的なイスラーム世界史である Baydawi の作品 Nizam al-Tawarikh の全文校訂テキスト、日本語訳、訳注の作成である。原典テキスト及び日本語訳・訳注の完成後、イスラーム世界史記述の展開に関して他の写本、刊本資料との比較対照の上、近世ペルシア語史学史、史料学、写本学上のいくつかの問題点を解明することが第二の研究目的である。上記のペルシア語史料については現在まで日本の内外で本格的な研究がなされていない。

研究計画・方法

平成11年度においてはペルシア語の古典史料 Nizam al-Tawarikh の校訂テキスト作成のための予備作業として、写本目録等の入手と検索、刊本の調査(2種あり、うち1種は未見)、現有の写本マイクロフィルム(トルコ共和国所蔵:Aya Sofya 3605)以外の古写本調査とマイクロフィルム取得のために英国への出張を予定している。校訂テキスト作成のための準備を進めた後、ペルシア文字入力によるテキスト素案の作成、及びそれに基づく日本語素訳を作成する。校訂テキスト及び日本語訳の作成に当たってはパーソナル・コンピュータを利用し、テキストのデータ・ベース化、索引の作成などについては専門家の助言や援助を受けて謝金を使用し、労力の提供を受けることとする。

A01 いわゆるティムール朝ルネサンス時代におけるペルシア語・チャガタイ語文献の研究

研究代表者 久保 一之
京都大学大学院文学研究科 助教授

研究目的

1) 本研究はティムール朝スルターン・フサイン時代(1469-1506)の首都ヘラート舞台とした学芸の高揚、いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のペルシア語やチャガタイ語の諸作品を、文献学的かつ歴史学的に研究し、当該時代に成立した古典作品の特徴および歴史的意義を明らかにせんとする試みである。具体的には、諸作品の書誌学的情報を徹底的に収集・整理し、特に研究価値が高い作品のテキストを入手し、読解・研究する。最終的には、論文発表以外にも、重要な作品の校訂テキストや日本語訳を公表して、研究成果とする。

2) 「ティムール朝ルネサンス」時代の学芸の特色を明らかにするには当該時代に著わされたペルシア語・チャガタイ語文献の精査およびテキスト研究が不可欠である。本研究において本格的な研究対象とすることができるのはごく一部の作品にすぎないが、最も代表的かつ特徴的と思われる作品を研究対象に選ぶことで、当該時代の精神文化に関わる、非常に独創的な成果が得られる可能性が高い。

3) 欧米や日本におけるこれまでのティムール朝時代史研究は、学芸や精神文化を問題にすることが少なかった。特に、「ティムール朝ルネサンス」時代の文献遺産についてはその全体像すらいまだ把握されておらず、専門家が参照するに足る研究成果はきわめて少ない。文献遺産の全体像の把握と古典文献のテキスト研究を課題とする本研究は、世界的に見ても斬新な試みとして位置付けることができる。

4) 研究代表者によって、「ティムール朝ルネサンス」を代表する3人の文人(ジャーミー、ナヴァーイー、ビナーイー)に関する基礎的研究や、当該時代に見られる学芸保護の事例考察を終えており、本研究計画に着手する上で有益な情報が既にある程度収集・整理されている。

研究計画・方法

1) 主要設備としては、研究計画の第一段階として書誌学的情報の収集・整理を行うため、ペルシア語・チャガタイ語文献の写本目録や原典刊本、それにパーソナル・コンピュータが不可欠である。パーソナル・コンピュータについては新規購入の必要はないが、写本目録や原典刊本については所属機関・部局所有のものだけでは不十分で、新規購入の必要がある。しかし、入手に時間を要するものが多く、初年度だけで必要な目録・刊本を買い揃えるのは非常に困難である。したがって、平成12年度以降も継続して入手できることを前提に、購入手続きを行う予定である。

2) 本研究計画は研究代表者の久保一之によって遂行される。研究の第一段階の書誌学的情報の収集・整理については、パーソナル・コンピュータを活用し、ペルシア

語・チャガタイ語文献目録（写本目録を含む）、原典刊本、その他参照文献に基づいて行う。必要に応じて大学院生等に研究補助を依頼する。この作業の結果、全体的な傾向等が明らかになるので、特に研究価値が高い作品を数十点リストアップする。それらの文献のうち、未公開のものや刊本が不十分なものについては、写本実物の調査、およびマイクロフィルム等複写入手の手続きを行う。調査・研究の対象となる写本所蔵機関の所在は、イラン、トルコ、ロシア、ウズベキスタン、タジキスタンほか数か国に及ぶが、初年度は比較的利用し易いイランとトルコの諸機関所蔵の写本を調査する予定である。実物を調査できた写本についてはその情報を整理し、マイクロフィルムを入手した場合は早急に紙に焼付け、製本して利用し易い形にする。そして、そのテキストを読解・研究し、必要に応じてテキスト校訂、日本語訳、重要語句・固有名詞のデータベース化を行う。その過程で得られた成果については、論文等の形で学界に公表する。

A01 中央ユーラシア地域に伝播した仏教の研究

研究代表者 吉田 豊
神戸市外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 影山 悦子
日本学術振興会特別研究員 神戸市外国語大学外国語学部

研究分担者 松川 節
日本学術振興会特別研究員 京大大学生態学研究センター

研究分担者 松井 太
日本学術研究会特別研究員 大阪大学文学部

研究目的

中央ユーラシア地域において様々な言語（イラン系諸語・ウイグル語・チベット語・モンゴル語など）で流布した同一原典テキストの伝承形態を探り、各文化圏に共通する要素と固有の要素とを解明し、その文化的背景を追究する。本研究は、各言語の原典を写本から解読できる専門家による共同研究であるため、同一原典テキストの当該文化圏における通時的伝承形態を位置づけるに止まらず、それが各文化圏を跨いで伝承されていく過程を究明するという、今まで手薄であった比較文化的観点へと発展可能なものである。

一つの典型的な研究例として、研究代表者らは、中国で成立した仏教文献『仏説善悪因果経』の漢文原典とソグド・チベット・モンゴル各言語版の比較研究をおこない、漢文及びモンゴル語版校訂テキストをすでに作成してい

る。本研究は、これらの成果を発展的に継承し、電子媒体と紙媒体による成果公表を目指しつつ、加えて、内モンゴル西部のカラホト遺跡から出土した写本をはじめとし、中央ユーラシア各地から出土した各言語仏典写本の電子テキスト化（画像データベース化を含む）を推進することによって、中央ユーラシア地域において多言語に翻訳され伝承されてきた仏教文献のデータを研究者間で共有することと、データの再配布が可能な環境を構築することを目指すものである。

研究計画・方法

多言語で伝存している仏教文献（例：『仏説善悪因果経』）の写本テキストについて、その収集と、テキスト・データベース化及び画像データベース化を推進する。写本テキストは、国内外の所蔵機関を通して写真・マイクロフィルムを入手することによって収集し、テキスト及び画像のデータベース化は、画像処理に特化されたパーソナル・コンピューター、画像読みとり装置、大容量記憶媒体を入手することによって実現する。吉田（研究代表者）はイラン系言語テキストと漢文テキストの収集と解読を担当し、松川（研究分担者）はチベット語・モンゴル語テキストの収集・解読とデータベースの構築、松井（研究分担者）はウイグル語・モンゴル語テキストの収集・解読、影山（研究分担者）はイラン系言語テキストの収集・解読と、テキストのデータ管理をそれぞれ担当する。

A02 「本文批評と解釈」

A02 韓孟聯句研究

研究代表者 川合 康三
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 愛甲 弘志
京都女子大学文学部 助教授

研究目的

唐代の韓愈と孟郊の二人を中心として作られた韓孟聯句は、古来難解をもって知られ、いまだに十分な注釈すらあらわれていない。しかし韓孟聯句は中国の詩史において大きな文学史的意味をもっている。形式上の新しさのみならず、詩の表現においても新たな試みが行われ、中唐という文学に大きな変容を生じた時代の特徴を集約している。